

古都炎上 …………… 応仁の大乱

マシュー・スタブロス

はじめに

京都というと、多くの人は平安時代の雅やかな姿を思い浮かべるだろう。或いは、そこまで、具体的ではないにしても、他の街にはない古い時代の雰囲気を感じるだろう。それ故、今もなお多くの人が古きよき時代の面影を求めて京都へ足を運んでいる。その中でも特に西洋の日本史研究者たちは京都の華やかな、比類のない長い歴史と文化の美しさに魅了されてきた。そのため、彼らの研究は、古代日本の神秘的で、伝統的なイメージの影響を受け、歴史上の明るい部分のみを誇張し過ぎていると言えないこともない。もちろん、京都において日本の貴重な歴史遺産と文化が育まれてきたのだから、それも当然だと言えるかもしれない。

京都は、日本の都になって（794、延暦13年）以来、千年以上にわたって、日本の政治、経済、文化など、あらゆるものの中心として、日本全国に影響を及ぼし続けてきた。そういう歴史をもつ都市は、日本では他に例がない。さらに、第二次世界大戦の戦火を受けなかった京都は、他の都市と異なり、戦前の景観がかなり保持されている。戦後入ってきた研究者たちが、京都の珍しい姿に目を奪われ、古代の町はまだ京都で生きてると錯覚したのはこのためである。

このように、西洋の研究者たちは、史実を考慮せず、京都の歴史の明るい面ばかりに集中してしまう。確かに、多くの立派な寺院や木造の典型的な京都の家並みなどの表面的な姿を見ると、京都が、魅力的な古代の町のように思うことは無理もないだろう。

しかし、京都には本当の意味での古代の町は残っていないのである。1467（応仁元）年から、1477（文明9）年まで、京都は戦乱に巻き込まれた。京都が歴史上体験した最も大きな戦乱の応仁の乱である。戦場となった京都は当時、一体どのように変わったのだろうか。この大乱によって、平安神宮や、金閣寺、京都御所などの京都の象徴的な建造物は、すべて焼失してしまったのである。

西洋人に限ったことではないが、残念ながら、京都の歴史を研究する人たちは、良いことばかりに目を向けがちである。現存する、西洋でなされた京都についての研究書には、京都の悲劇的史実についての記述が十分ではないように思われる。こういう意味で、西洋から見られた史観はズレていると言って良い。特に、応仁の乱で戦場となった京都が、どのような影響を受け、町全体がどのように変わっていったのか、或いは京都の庶民や、役人などの生活が応仁の乱によってどの程度乱されたのかという点についての記述が不十分

(2)

であるように思う。

今回のレポートでは、これらの点を踏まえ、応仁の乱を中心として京都の歴史について考察してみたいと思う。

応仁の乱の原因

京都を焼け野原にし、幕府の権威を失墜させた巨大な戦乱の原因は一体何だったのだろうか。それは、将軍の後継者問題に端を発している。

足利八代将軍義政は、位人臣を極め、その私生活は豪奢の限りを尽くした。しかし、権臣らが互いに勢力を争い、政治が意のままにならないため、40歳にもならないうちに、隠退の志を抱いた。だが、将軍になれる実子がいなかったため、当時僧侶となっていた弟の義尋を還俗させて、家を継がせようとした。寛正5（1464）年、義尋は義視と名のり、正式に義政の後継者と認められたのである。すでに、管領を辞職していた細川勝元が執事となり、義視を補佐することに決められた。ところが、その翌年の1月23日、義政に実子の義尚が生まれたのである。義政が実子の義尚を将軍にすることを望み始めたのは想像に難くない。そして、突然、義視が排斥されることとなり、義政と義視との間には権力闘争が起ることになった。しかも、それぞれの陣営が有力大名を味方に引き入れ、多数の軍勢を京都に集結させたため、幕府を二分し、京都を焦土と化した大乱にまで至ってしまったのである。

戦場となる上京

当時、多くの守護大名でも、家督相続をめぐる深刻な争いが起こっていた。それらを巻き込んで幕府内が義視派と義尚派の両派に分かれていくのに、さほど時間はかからなかったのである。そして、その両派の頂点に祭り上げられたのが、細川勝元と山名宗全であった。応仁元（1467）年、この2人を総帥として、いわゆる東軍と西軍が形作られ、京都の上京を舞台として戦いが開始される。応仁元年5月の戦いにおいて、東軍の細川勝元は将軍足利義政の居所であった花の御所を押さえ、一方、西軍は堀川の西に位置した山名宗全の屋敷を中心に陣取る。両軍は東西に分かれて相対し、以後、京都における両軍のこの位置関係は乱の最後まで基本的に変わらない。

さて、戦闘に関しては、最初は東軍がしばらくの間、優位を保っていた。だが、それも長くは続かなかった。同年8月、西国から入京し、戦いに加わった大軍によって、情勢は一転し、西軍が軍事力において東軍をはるかに凌ぐことになった。西軍の攻勢は激しく、東軍はいちはやく後土御門天皇・御花園上皇を花の御所に避難させるが、9月中頃には、ついに花の御所を中心とする上京の一角にまで追い込まれた。本格的な戦闘が始まってか

らわずか4カ月足らずのことであった。

西軍の圧倒的な軍事力の前に、京都の北東の一角に追い詰められた東軍ではあったが、彼らはそこで強固な防御陣地を築き上げていたのである。上京の花の御所を中心に築かれた、いわゆる「御構」と呼ばれた防御施設の出現である。

応仁元年の京都上京 応仁の乱で東西両軍が対峙し続けたのは上京、それも一条より北においてであった。応仁元年(1467)9月、花の御所を中心とする上京の一角に追いこまれた東軍はそこに塙と塹で堅牢な「御構」を造り上げる。図のほぼ中央に見える土御門内裏は、応仁元年以降、文明9年(1477)まで西軍の支配の下にあり、10年間の長きにわたって、無人となる。「京都の歴史」第3巻より。



東西両軍の間には、はやくから一条通りに沿って東西に巨大な空堀が掘られていた。それは応仁元年6月の時点ですでに両軍を隔てていたというが、東軍はその堀をも取り込む形で、南は一条、北は寺の内、西は小川、東は烏丸という実に広い範囲にわたって、塙と監視所に囲まれた構を造り上げたのである。

では、上京の北東に突然と姿を現したこの構を念頭におきながら、今一度、応仁の乱勃発後の京都の景観を見直してみよう。

5月の戦闘以来、洛中で主戦場となったのは、上京であった。5月末の合戦では、上京

の多くの部分が戦火を被っている。しかし、花の御所に隣接する相国寺が焼けたのは、10月になってからのことである。当時、有名な土御門内裏や仙洞御所には最後まで火は放たれていない。だが、応仁の乱によって焼け野原となったのは、洛中でも上京のある地域にほぼ限定されていたのである。

乱で最初に火が放たれたのは、公家・武家の屋敷だったのである。しかし、東西両軍ともが、京都において生き延びていくためには、何が必要で、何が必要でないかを正確に見定めていたことは明らかであった。こうした意味で、彼らは一般の商工業者が生活する下京が焼けてしまえば、自分たちの京都での存在そのものが不可能になることをよく承知していたのである。にもかかわらず、周囲の国々に通じる京都の七口の通路が西軍に抑えられたため、商売が不可能になったときがあったのである。

では、当時、上京はどのような状態だったのだろうか。『応仁略記』によると「二条上、北山東西ことく焼野の原と成て、すこぶる残る所は將軍の御所計也」とあり、乱の勃発直後の京都が壊滅状態であったことがうかがえる。

大乱のなかの京都

当時の主な建造物の中では、六波羅蜜寺、三十三間堂、千本釈迦堂などが、かろうじて乱以前の姿をとどめているにすぎない。この乱では、多くの寺院も焼失したのである。もちろん仏像や絵画といった移動可能なものは別だが、京都は、この時を境として、古代の景観を失った。

洛外のいくつかの場所においても、東西両軍の戦闘の広がりによって影響され、戦いが起きた。特に京都の近郊では東の山科、南の稻荷、西の西岡と断続的に両軍の衝突が続き、数多くの寺社も兵火によって、焼け落ちていったのである。また、こうした建造物だけでなく、京都の商人や市民など一般の人々も住まいを失ってしまったのである。戦場の広がりによって、両軍の陣屋ばかりか公家の邸宅や社寺、それに民家までも次々に焼失してゆき、住居を失った公家らは、相次いで京都の郊外や隣国へ避難していた。特に住まいを失った上京の貴族や公家などが大勢移動させられたのである。乱が始まった後、戦火を避けるために、京都を離れていった庶民は多かった。

一方、戦火によって、焼け出された公家・武家たちの多くは東軍のいわゆる「御構」に避難し、仮の住まいをその中に構えた。また、公家・武家だけでなく、下京の有徳者（富裕者）の多くも狭い構に入り込んだが、そこでの生活は決して安定したものではなかっただろう。戦火に囲まれた避難者たちは不安に襲われたはずである。込みあった構において疫病とともに恐れられたものが、他にもう一つあった。火災である。言うまでもなく、当時の木造建造物は押し並べて火に弱かった。文明7（1475）年2月、花の御所で起こった

火災では、数百軒とも二千軒ともいわれる家々が焼失したのである（『実隆公記』）。またその翌年、花の御所をはじめとして、またたくまに構の3分の1が焦土と化した火災も被害が大きかった。戦火を被った公家・武家たちの居所（陣所）は、合わせて40余箇所にも及んだという。東軍の「御構」はこのように戦火に囲まれた状態で、なかに隠れていた人たちの深い悩みは容易に想像できよう。

疫病といい、火災といい、狭い構でいったんそれが起これば、人々はいやおうなく自分たちが構という一つの運命共同体に住んでいることを思い知らされることになったのである。

乱の終焉と京都の復興

長かった応仁の乱の幕切れは実にあっけなかった。文明9（1477）年11月11日夜、突然京都に平和が訪れた。

始まりは大内政弘の東軍への投降にあった。この日、政弘が兵を率いて京都を発つや、^つ要を失った西軍の諸大名はなだれを打つようにしてこれに続き、京都を去っていったのである。

大名らは京都を去るにあたり自軍に火を放ち、その火で仙洞御所（二条亭）は類焼する。しかし、土御門内裏は無事であり、彼らの陣所に近かった二条近辺だけが焼ける。ちなみに、二条通りに沿って京都をちょうど中央で分断する東西に走る空堀が、この後も長く広がっており、上京と下京を大きく隔てる境となっていた。

さて、西軍の撤退に関して起こった出来事で印象的なことが、一つあった。それは焼け残った土御門内裏に人々が殺到したことである。西軍の陣所を焼いていた煙がまだ立ち込めるなか、11日の朝から始まり、公家の甘露寺親長らが構から堀を越えて警護のために駆けつけたときには、すでに障子などは略奪されてしまった後であったという。10年もの間、西軍の手に落ちたままで「有名無実」（『親長卿記』）「荒廃過去」（『実隆公記』）と荒れほうだいとなっていた土御門内裏ではあったが、それでもまだ略奪に値する品物が残っていたのであろう。

こうして平和が訪れた京都ではあったが、再建への道程は決して容易なものではなかった。とりわけ上京では、戦鬪の再開に備えてであろう、「御構」はすぐに取り壊されることなく、乱中と変わらない環境下での生活がしばらく続いている。だが、その構も解体される 때가ようやくやってくる。

きっかけは、西軍の撤退後、1年余りが過ぎた文明10（1478）年12月25に再び起こった「御構」の火災である。この大規模な火災によって、「御構」の3分の1が再び焼け野原となり、これによって、「御構」は実質的に解体され、ここに上京の再建が開始される。

その第一歩は花の御所の新造であった。文明11年2月には、御所の本格的な再建が始

まった。それと同時に公家・武家たちの屋敷の再建も始まる。また、土御門内裏の修理も開始され、上京には再建の槌音が響き渡る。

乱後の京都の再建は決して万人に平等ではなかった。公家・武家の屋敷が再建される一方で、多くの一般民衆は「小屋」の生活に甘んじていた。その上、花の御所や土御門内裏などの再建費用までが、いわゆる「懸銭（税金）」として京都の人々に課せられていた。乱の終焉は、京都の民衆に平安をもたらさなかったばかりか、逆に重い負担を強いる結果になったのである。

「懸銭」を恐れ、「堺・坂本辺町人」たちは京都に寄り付かなくなった。それほど、自分本位な為政者のやり方によって、京都の復興は大幅にそのスピードと落とすこととなる。乱後のさまざまな混乱も復興の大きな障害となっていた。乱中、構に難を避けていた有徳者は「捨置」いた下京の家や土地の復活に奔走しており（『政所賦銘引付』）、乱前の生活は簡単には戻ってこなかったのである。

文明11（1479）年10月には土御門内裏の修理がようやく完成し、後土御門天皇は新内裏に環幸した。応仁元年8月、花の御所に避難して以来、実に13年ぶりの環幸であり、人々はこれによって京都における大乱が終わったことを肌で感じ取ったに違いない。しかし、同時にまたこれによって、多くの人々は京都の復興がいかに困難なことかをも、知ったはずである。なぜなら天皇が再び入った土御門内裏は、乱前のものと比べて小さく、加えて、元の位置から少し離れた所に急いで造られたからである。

しかし、愚かな為政者の思惑を越えたところで、京都の町はゆっくりと復興への道を歩み始めていく。

新内裏が出来上がってから約5年後、ある旅の老連歌師が久し振りに粟田口から新内裏の風景を見て、次のように書き留めている。

内裏は五月の麦の中、あさましとも、

申にもあまりあるべし、（『宗長日記』）

5月の明るい陽射しの下、麦畑のなかに浮かぶ内裏。それは応仁の乱の被害の深さとともに、ゆるやかだが逞しい日々の営みが確実にこの地に根付きつつあった有様をあたかも1枚の絵を見るように鮮やかに目の前に浮かび上がらせてくれる。

何年かの間、復興活動は順調に続いた。戦乱を避けるために、京都を離れていた多くの人々もやがて、町をもとのように再建するために戻ってきた。建物は新しくなり、町も乱以前とはまったく違った景観となった。京都御所や平安神宮などの京都の象徴的な建造物も再建されたが、結局、もとのように雄大にはならなかった。京都の風情も、すべて応仁の乱より後にできたものである。例えば、乱で中断した祇園祭が、再興されたが、このときの祇園祭は、かつての祇園祭ではなかった。国家や貴族の祭りから、京都の町衆や庶民たち

の祭りとして、生まれ変わったのである。このときの京都は、あたかも西洋のルネサンスにも比すべき、呪縛^{じゆばく}から解き放たれた、市民文化の躍動する時期を迎えたのである。

応仁の乱は、古代を消し去ったが、新しい京都を生み出したのである。安土・桃山時代^{あづち}の豪壮^{ごうそう}で華麗な躍動する文化。それは、応仁の乱 100 年の、一見乱れたように見える歴史の展開と、表裏一体のものであった。

乱後、権威を失墜した幕府と京都の乱れた状況は、日本各地に影響を与え、地方においても新たなる戦乱が起こった。この時より戦国時代に入り、乱れた世の中となった。天下統一の画期となる、織田信長の入京（1568（永禄 11）年）までのおよそ 100 年間、戦乱は、幾度となく京都を襲ったのである。

だが、応仁の乱の直後の時代ほど、京都が活気にあふれていたときはない。11 年にわたる戦火の後に、たちまちにして復興した京都の町々は、以前にもましてにぎわい、人々の表情は明るくなった。

まとめ

昨年（1994）京都は建都 1200 周年を迎えた。古代から現代にかけて、いろいろな原因によって、何度も京都の姿は変えられてきたが、応仁の乱ほど景観に影響を与えた戦乱はなかった。応仁の乱は京都の姿を変えた最大の出来事だったのである。

古代の町はまだ京都で生きているというのは、現代人の錯覚である。特に西洋の日本史研究者は、このことを忘れてはいけないのである。

このレポートでは、15 世紀に京都で起きた応仁の乱のことを考察したが、戦乱のことよりも、むしろ京都の完全破壊、そして復興ということについて述べたかったのである。京都弁でいう、「はんなり」とした京都の風情は、実はすべて応仁の乱より後にできたものである。このことを頭において我々は京都というものを理解しなければならないのである。

参考文献

- 井上満男 1990 「平安京再現：京都 1200 年の暮らしと文化」 河出書房新社
 下坂守、佐藤和彦 1994 「京都ルネサンス」 河出書房新社
 村川修二郎 1986 「日本史もの知り事典」 主婦と生活社
 長谷川秀記 1992 「読める年表・日本史」 自由国民社